宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価一年 送料共500円

賑わった秋の大祭

＝沖、中両宮を始めとして＝

十月八日、九日（旧暦 九月十四、十五日）に宗像大社沖津宮、中津宮の秋季大祭が厳粛に斎行された。

前日の八日は宵宮祭で、午后五時に沖津宮遥拝所、又中津宮大殿に於て、それぞれ祭典が行なわれた。

海上青く澄み渡る小春日和、薄靄が偉かに水平線上にかゝる程度で、拝所の祭壇遥かに透して神島沖ノ島が拝され、何時もながら、遥拝所の祭典は素朴ではあるが、誠に荘厳な祭儀であった。

同日は午后一時より、大島にがける小中学生の相撲大会、同七時より青年団員による相撲大会が開催された。とくに小学生の相撲は本当に可愛で、声援の参拝者は惜しみなき拍手を送っていた。

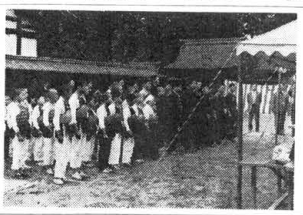
本大祭の九日は前日に増しての好天候で、早朝より献魚奚持参の村人と、諸準備に尽力の惣代の方々によって社頭は賑って来た。

午前九時半、沖津宮大祭が遥拝所で、御嶽神社祭が御神体山である御嶽山上で、それぞれ行なわれて、漁止の上会村あげてのお祭りで、前日の小、中学生の相撲大会は個人、三番、四番の勝抜きに続き、町村対抗は極めて盛大で金島なわれたが、御社頭は、参列者で埋まり、本年は特に多方面の崇敬者団体の参列が多かった。

両日共に絶好の天候に恵まれた。午前十一時、中津宮大祭が行

領たる三州吉良では、よい殿様として領民に人望があったと伝えられる。三州吉良の人々は演劇当臣蔵を見ると、そこに演出される吉良は似ても似つかぬデッチ上げの非道人だと言う。

若しも吉良義央が仁徳の領主として、領民に人望があり、演劇にも現われるような悪者でなかったとしたら、討入られた彼も気の毒である。赤穂城主の浅野内匠頭長矩は、狭量短慮な主君として大きな人間的缺陥があったことにもなりかねないし、浪士の討入りは単に封建の世代に起った武士道の意



各地の秋祭り

的原さんのお祭り

許斐氏の殿、八並の部落に在る的原神社秋季大祭が、去る十月十二日伊藤聡言（上西郷）奉仕のもとに、宗像大社より幣帛を奉り、脇殿十一郎総代、占部貞義区長以下の参列を得て斎行された。

この神社は、古く許斐城主の配下であった八並、村山田、平井各部落の総社として盛大な祭並びに御座が行われたと言われる。

本年は、異状気温と言われ乍らも村の垂れ穂は黄金の畳を敷きつめた様だ。御社殿では、古式豊かに種々の神饌を奉り祭典を終り、神殿での御座（直会）を行い、又下座は、稲の刈入れを目前に控えて、終に秋の長閑な彩をさす当番家、山の口の小田氏宅に於て盛大に行われた。

―縫殿宮の宮座―

去る十月の十日、はるかに玄界灘を望む勝浦の里、奴山の小高き丘に鎮まります縫殿神社の宮座祭が斎行された。これは秋の豊作を感謝する祭で祭典のあと御座が開かれる。部落総出で行うこの御座は奴山名物の〝ドジョウじる〟が出る。舌つづみを打ちながら四方山話に花が咲き、秋の豊作に感謝する人々の酒盃で賑った。

午後一時半、祭典直会終了。黄金色の稲穂に送られて勝浦の里をあとにした。

織幡神社祭日変更

宗像郡鐘岬に鎮座する当社境外摂社織幡神社は、部落の意見に依って この秋から祭日を変更。毎年十月九日を九月三十日とした。

徳山宗像神社祭

秋空高く澄み渡る十月の五日、山口県徳山市出光興産徳山製油所に鎮座される宗像神社の秋季大祭が、宗像神社久保宮司他二名の神坂並に二名の巫女、出光徳山製油所々長以下坂員三十余名の参列のもとに厳粛に斎行された。雲一つない秋空、あざやかな緑の芝生、その中に白砂の小道が社まで続き、きれいに掃き清められていた。朗々と祝詞が奏上され、雅楽の音につれて清楚な浦安の舞が奉納された。美しい神苑にかしわ手が鳴り響いた。かくて祭典は終了した。祭員一行はこの後出光マイクロバスにて大浦油槽所に向い、途中製油所内を見学した。

巨塔から吹き出る炎は、ゴウーくとなり渡り、タンクの下からはシューくと白煙が立ち昇っている。すべてオートメイション化された二十余万坪に渡る大工場に人員総数七百余名。一日の勤労者百四十名と聞けば、この人影少ない理由もうなずけよう。

青い周防灘を右にながめながら大浦油槽所に着く。五万トンタンクが数基ならぶ姿を目下にする小高き丘の上に大浦油槽所宗像神社が鎮まっている。所長以下十数名の参列で秋季大祭が厳粛に斎行された。直会には所長さんの親身のなもてなしに一同感激、午後一時半大浦油槽所をあとにした。

阿蒙少言

世の中には人の好まない職業、否嫌われるが人間の活に欠くことの出来ない仕事が幾つもある。その最たるもの糞尿汲業だが、神聖な職業たること論を待たぬ。これに従事して三十余年の老夫婦が、先日東京で黄綬章を頂戴した。黄綬でも藍綬でも、それはどうでもよい。自分達がいみじくも出しになった汚物であるのに、汲取に行く夫婦を人間以下の動物でも来たかのように扱う主婦を、「気の毒な人間だ、こんな人に生きる喜びがほんとうにわかるかな」と逆に同情しながら、糞尿の中に人生を楽しみ、幸福な家庭を営んできたと述懐。大八車から今日の衛生車まで、幾歳月、父母を送り、迎える家族に感慨深ところ、尊敬の目を以って神聖な仕事と理解していたと云う。何も言うことはない、貴重な人生だ。折々わが家を訪れる汲取人が、仕事を終えて、庭の花を賞めて一服して帰る。老婆も庭にならんで、花を語り合う「疏其を喰い、水を飲み、肱を曲げて枕となす。楽しみ亦そ の中に在り」の生きる喜びを教えられる話。不義の富は語る要なし。庭の草花をいつくしみ、楽しむ気持、これが人間の心の花を賞でて喜ぶ心にまで成長すれば、糞尿の汲取り亦楽し。資美を尽した麗装の美人、大いに糞尿を製造する機械と謂われた唯物論者も満足するか。臭い文章やめてもっと清涼の秋色を、と求められたら、次の答となる「みんな臭いのだ」。それにしても父母の仕事を貴重な職業と思う子弟を教育した母の愛は、これ亦言うことなし。学校で友達を泣かせ、先生に怒られたりたかたこと数知れぬ老骨も、雪の中毛布を纏って校舎の外に待ち、授業が終ると、背に負って泥濘を歩んだ母の俤。これは更に言うことなし。

（白雲）

論説＝討入られた吉良

先年NHKの企画で、演劇「赤穂浪士」が連続放送されて、テレビ界はまさに義士ブームの観を呈した程であった。戦後二十年、国民の道義思潮は、対国家観対社会観或は対家族制度観の変革から、停滞変調を見たと言われるが、武士道の忠義とか、仇討とかの是非の批判を越えて、赤穂浪士の快挙は国民の各層を通じて、驚異的な人気を博してきたのである。

それは単に戯曲の浪花節的魅力ではない。あらゆる困苦犠牲を忍んで、果さねばならぬ人間の道への敬慕思慕の現れと見るべきであろう。

義士ブームに刺戟されて、職員間に、播州赤穂を訪ねる大石内蔵之助良雄をはじめ、四十七士の幽魂に敬意を表したいとの議が起り、頃日、その討入りならぬ巡歴が実現したのである。即ち赤穂城址を踏み、大石神社に詣でて、各位の義心を拝したのであるが、旅中浪士と吉良上野介義央の立場、演劇上の表現と、史実の解釈等に就て種々の意見が出た。

赤穂開城一藩離散の後、血盟の一統が苦心惨憺の結果、壮烈な復仇の悲願成就となり、世上に義士と称えられ、快挙と賞賛されるに至ったことは、それでよい。ところが浪士の義魂を敬賞する人心の度合いが強ければ強いほど、敵役の吉良義央はひどい悪者にされねばならない。小説や、戯曲の表現効果は、敵役をひどい悪者にするほど、演劇的価値が増大する。

討入られた吉良義央は、果してどんな人物だったろうか。勅接遇の指南役たる高家首班の地位を利用して、驕慢な態度で賄賂を要求し、応じないために堪忍袋の緒を切るほどの恥辱を与える老獪であったであろうか。吉良義央の所領たる三州吉良では、よい殿様として領民に人望があったと伝えられる。三州吉良の人々は演劇当臣蔵を見ると、そこに演出される吉良は似ても似つかぬデッチ上げの非道人だと言う。

若しも吉良義央が仁徳の領主として、領民に人望があり、演劇にも現われるような悪者でなかったとしたら、討入られた彼も気の毒である。赤穂城主の浅野内匠頭長矩は、狭量短慮な主君として大きな人間的缺陥があったことにもなりかねないし、浪士の討入りは単に封建の世代に起った武士道の意気地を貫いただけともなりそうだ。いずれにせよ、元禄の快挙として、華やかに舞台に登場する大石以下の諸士にとっては、一身一家の立場は大きな悲劇であった。悲劇の因を成すものは、長短であったか、吉良であったか。

この元禄事件に限らず一般に、文献学者の文献その他の資料による史実の究明に就いて考えると、それは的確でない場合が多かろう。事件当時の有力な文書記録にかくあるから真相がこれだとか、その資料が当人の真筆だから、事件の内容に誤りがないと即断するものも、所詮は確率の高い推定の叙述として歴史を考える外はないだろう。史実究明の限界は常にあるだろう。昨日起った世上の事件でさえ、折々誤って報道され、又その誤伝がそのまま事実として記録に残される場合もあり得る。

まして数百年、数千年の故事の学問的解明など、なかなか容易でない。如何なる資料を以ってしても、人間界の出来事に関する限り、真実を的確に捕捉し、叙述することは極めて困難なものである。人間の心の歴史は、つづられない。真実は神のみが知る永遠の謎であろうとさえ言える。

さて話を討入られた吉良に返す。赤穂浪士の遺芳を、今日まで多くの庶民が世々変ることなく敬愛し、今後も尚永く、苦難に堪えても、人間道の美を守らねばならぬとする人心教化に、役立つ深い意義があるなら、吉良が領民に人望が厚く、決して非道な悪者でなかったとしても、その霊は笑って、小説に演劇に老獪非道の役割に我慢してもらわねばなるまい。

赤穂浪士の元禄快挙の発端因素が、どこにあっても、大石以下の遺芳は敬慕したい。主君長矩軽率なる行動は、そのいづれかに事件の因素があったとしても、それも亦神のみが答え得る永遠の謎とあきらめねばなるまい。

播州赤穂を探訪して、浪士の義魂を拝して、難しい意見が生れたが、討入りの師は泉岳寺で一統の声なき声を聞いてみよう。

（白雲）

宗像大社御用達

祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 九三七二番 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

第五十四回 宗像大社献詠歌会詠草

十月十日　於社務所詠草到着順

神湊　隣船　俊
何となくおちつきのなき我か心寂しく見つむ煙草の煙

名残　竹原　圓
出揃ひし稲穂に露のかゞやきていまか出るらむ戸田山の月

宮田　片山　一
碁空をのそむ日もなきこの土用稲熱の薬いまだまかぬに

陵厳寺　真鍋　万三
安楽の椅子にもたれて池見ればひぶな親子が楽しゝ泡げり

飯塚　萩本　夕照
家に在らば子らの読まなむ放浪記わが小遣銭さ貧で買ひ飲く

村山田　吉田佐市郎
風強く時雨し空も晴れて虫なく庭にさゆる明月

永島　まち
母の日に孫のくれたるカーネーションの萌今は見事に咲けるうれしさ

厚狭　篠田　俊樹
夜明けしと思へば早やもしみること蝉鳴き出でて夏まだ去らず

福岡　高橋　昇
放生会の様々遊れば神と人幾世経るとも変りあらせじ

小倉　大和　虎雄
昨夜の雨跡なく晴れ青き空娘等の乗る機の安らかに飛べ

津屋崎　麦野　時雄
教へ子がやがて還暦迎ふると同窓会に併せ謝恩す

沖ノ島　佐藤市五郎
離れ行く人を見送りて一人立つ人の心を知るや知らずや

津屋崎　白石百合蔵
秋空になかる〻銀河鐘きてはるかにひゞく祭の太鼓

香椎　織田　橡雨
稲雲の靡かさに見るもまた田よ秋を稔りの田ゝの朝明け

（農村の秋）

手光　森　八蔵
我が庭の障子明ければ名月は南木の御山に清く照りぬ

戸畑　田中ハツセ
しゝ手でたたかれたこと数知れぬ老骨も、雪の中毛布を纏って校舎の外に待ち、授業が終ると、背に負って泥濘を歩んだ母の俤。これは更に言うことなし。

福間　中村　吾郎
母出てて畑に草を取りてをり坐る筵の位置を変へつゝ

吉留　白木うめの
玉の汗顔一面に手術する夫の眼はキラキラと光る

吉田　占部　由久
綿菓子をほしと思ひし幼時詣でし放生会老いて懐しむ

香椎　桜井　秀
夕暮る磯のしゞまの冷え早し弧独の想ひ直に泌みつつ

桜井　ツ子
足早に秋台風の過ぎしよりわが庭に紅しバラの一輪

江口　辻野　開造
湯川山いたゞき登る旭光に刻一刻と瑞気みなぎる（晴の散歩）

田熊　小野角次郎
花野道蜻蛉群れ飛ぶ我が行手草物背負ふは行商らしも

〃　小野　花居
白秋のたわ、乱れし寺彼岸秋澄む空に読経流るゝ

大濠　江崎　琴子
久に逢ふ亡き妹に似しおもざしの子は生び立って医大に入りぬ

（十三年目の再会）

勝浦　永島　計七
旧道にならびて赤し曼珠沙華年毎々の古き思ひ出

東郷　藤崎　辰子
よく熟れし無花果めばふるさとに老いゆく母の姿浮び来

平井　土性　とよ
おぎろなき秋澄みて白雲の北に動くも陽に映えつゝ

多礼　藤崎保五郎
病む人の影をうつせる池の面直鯉緋鯉が餌争へる

田島　力丸　登
帆柱の山に明月出づるときわが古里の月はいかにぞ

（八幡にて中秋の明月の日）

東郷　藤崎　辰子
よく熟れし無花果めばふるさとに老いゆく母の姿浮び来

平井　土性　とよ
おぎろなき秋澄みて白雲の北に動くも陽に映えつゝ

多礼　藤崎保五郎
病む人の影をうつせる池の面直鯉緋鯉が餌争へる

田島　力丸　登
帆柱の山に明月出づるときわが古里の月はいかにぞ

（八幡にて中秋の明月の日）

東郷　藤崎　辰子
よく熟れし無花果めばふるさとに老いゆく母の姿浮び来

平井　土性　とよ
おぎろなき秋澄みて白雲の北に動くも陽に映えつゝ

多礼　藤崎保五郎
病む人の影をうつせる池の面直鯉緋鯉が餌争へる

田島　力丸　登
帆柱の山に明月出づるときわが古里の月はいかにぞ

（八幡にて中秋の明月の日）

残月を仰ぎて書きしと子がくれし文読みて有り雨の夕に

宮田　片山　朔子
憂へる台風それて和ごむ田に入れば稲の花ほこりつゝ

（四面下段へつゞく）

戸畑　伊規須ゆき
東天のうすくれなゐに照り映ゆる山の上の雲松の上の雲

岡垣　長畑　房江
水色の蚊帳を透して明け初めぬ身を包むもの並べて寒ひく

勝浦浜　永島　文子
台風のそれてをろかむ望の月テレビは報ず被災地の様

（九月十日～十三号台風）

吉田　占部　由久
綿菓子をほしと思ひし幼時詣でし放生会老いて懐しむ

香椎　桜井　秀
夕暮る磯のしゞまの冷え早し弧独の想ひ直に泌みつつ

桜井　ツ子
足早に秋台風の過ぎしよりわが庭に紅しバラの一輪

江口　辻野　開造
湯川山いたゞき登る旭光に刻一刻と瑞気みなぎる（晴の散歩）

田熊　小野角次郎
花野道蜻蛉群れ飛ぶ我が行手草物背負ふは行商らしも

〃　小野　花居
白秋のたわ、乱れし寺彼岸秋澄む空に読経流るゝ

大濠　江崎　琴子
久に逢ふ亡き妹に似しおもざしの子は生び立って医大に入りぬ

（十三年目の再会）

勝浦　永島　計七
旧道にならびて赤し曼珠沙華年毎々の古き思ひ出

東郷　藤崎　辰子
よく熟れし無花果めばふるさとに老いゆく母の姿浮び来

平井　土性　とよ
おぎろなき秋澄みて白雲の北に動くも陽に映えつゝ

多礼　藤崎保五郎
病む人の影をうつせる池の面直鯉緋鯉が餌争へる

田島　力丸　登
帆柱の山に明月出づるときわが古里の月はいかにぞ

（八幡にて中秋の明月の日）

宗像談話室　鳶を産んだごぜん様

「お宅のお父さんには大変お世話になったことがあります」と、ごぜん様の後継宮司は終戦直後から公転に在る関係で、種々の会合に出る機会が多く、よくこんな挨拶を聞く。中でも元警長や元警部など警察官だった老人から、こんな挨拶をされた時、おやじがどんな迷惑をかけたか知れぬと想像しながら、返答にまごつく場合があると云う。

返答にまごつくには十分の理由がある。ごぜん様の行状記が、その理由を物語る。

ごぜん様の行状記をよく知っている老人連は、独り埒外を徒走するような離れ駒のごぜん様に、物静かで他人にご無礼をしない後継宮司がよく出来たものだと、心ひそかに奇異の感懐を持つに違いない。鳶が鷹を産んだと、率直にごぜん様に舌鋒を向けた弁護士の一部が警備を兼ねて同行して来る慣習があった。祭典が型通り終る話を冒頭のまごつき論の解明に戻す。戦前官幣社の大祭には、知事や部長が奉幣使として奉仕したもの。それに警視の警察署長や幹部が警備を兼ねて同行して来る慣習があった。祭典が型通り終る時その署長と料亭で顔が合う。ごぜん様の腹の出が頭を上げ、単刀直入の本領を発揮して遠慮はなく、直会と称する酒宴が開かれる。風流な知事は尺八までご持参で、あとの祭を楽しんだ。

「お前の子どもは鳶が鷹を産んだようなものだ」と酒盃の間に一本先生が喰いつく。「馬鹿を言うな、鷹が鳶を産んだんだ」と負けないごぜん様。「そうか、そんなら元来お前が出来過ぎとるのだ」と返せば、出来過ぎの一語に力がはいって、両人とも皮肉調を感じ取って爆笑。何が何を産んだのか傍の者にはわからぬまゝに、鷹だ。意気投合した相手なら別だが、気に喰わぬ署長でも来た時と云えば、ごぜん様の腹の出が頭を上げ、単刀直入の本領を発揮して遠慮はなく見向きもせず物も言わないことも見られた。サーベルの権威を笠に着て無暗に威張る署長も居た。あるいない。ごぜん様の人徳と云えるか。

反対に気の合った署長とは、双方職務を離れて盃友の親睦が続けられた。「大変お世話になった」との挨拶を聞く度に、後継宮司はこの人は泉水署長か盃友署長かと、返答にまごつくのだそうである。さもあるなんこぜん様のことだ、代々の署長に苦汁か甘露かどちらかのご馳走を献じていたに違いない。

車止めの立札のある道路を、自動車で通り抜けようとして、警官が表沙汰とはならず、ごぜん様が警察署に引っぱられた話も残っていない。ごぜん様の人徳と云えるか。

反対に気の合った署長とは、双方職務を離れて盃友の親睦が続けられた。「大変お世話になった」との挨拶を聞く度に、後継宮司はこの人は泉水署長か盃友署長かと、返答にまごつくのだそうである。さもあるなんこぜん様のことだ、代々の署長に苦汁か甘露かどちらかのご馳走を献じていたに違いない。

車止めの立札のある道路を、自動車で通り抜けようとして、警官に制止を喰った。通れるものを通さないとは何事かと、ごぜん様は車を後退させない。紋付羽織に袴、桜のステッキを握って悠然と車中に鎮座する海の荒神。遂に圧倒されて警官が負けた。寝かろそれの警官の名刺を受取って、通り抜けてしまった。

「あの警官はなかく職務に忠実だ。ほめてやってもらいたい」と、署長に電話をかけたごぜん様。「多分あなたと思っていた。困りますね」と笑う署長。さてもごぜん様はよき時代を、縦横通った神主だった。よほど神明の思召しに適った侍でもあったのだろう。

秋晴れの玄海に堂々と三百五十隻の大船団

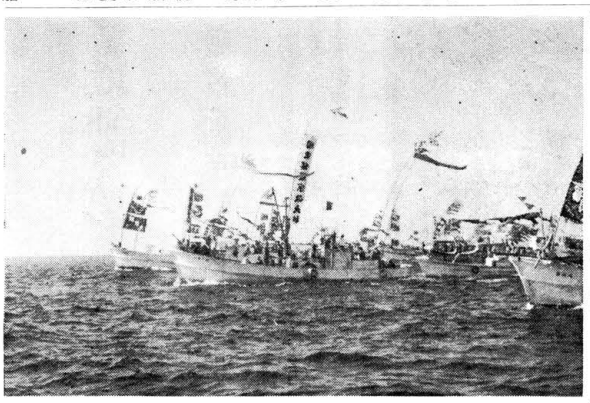
みあれ祭斎行

十月一日、早朝より快晴。八時の遷霊出御祭には中津宮拝殿前に各漁協の組合長、水難救済所長、大島の沖中岡宮奉賛会の関係者が居並んだ。本殿の御扉前には沖津宮と、中津宮の神璽が安置され、厳粛な祭典が斎行された。

八時十五分、神璽を捧持した神職を先頭に、波止場迄お下りになった。波止場は、宗像都の七浦から馳けつけた漁船群の轟音と、朝日に輝やく大漁旗で充ち溢れていた。波止場の東側も、石側も、更に外側にもひしめく漁船群。

八時三十分、高らかに打ち上げ花火がこだました。神璽は、沖津宮は鐘崎の新幸丸、中津宮は大島の神一丸に夫々御座乗。

先導船が港口を出る。それに続いて二列になって御座船と供奉船が十三隻ずつ続く。その間におよそ十一、二列になって、十五隻ずつの随行船が従った。周囲には七隻の水難救済船が警備に当り、更に海上保安庁の「わかちどり」「いそゆき」、そのほかに快速船が表沙汰とはならず、ごぜん様が海上は微風。さざ波程度の海面に全船団が勢揃いできたのは約二時間の為に見えない。



写真中央は御座船、後方は供奉船、随行船

十分位経ってからであったろうか。見渡す限りの大船団である。各船の先頭には大社より頒賜された「浪切御幣」が立てられ、飾れる限りの大漁旗がはためき、全船団の機関の音がリズムならぬ一つのリズムとなって進む。

西の空からヘリコプターが一機飛んで来た。西日本新聞社の取材であろう。高く低く船団の上を飛ぶ。時々、御座船の上空で停止して、撮影機を操作するのが見られた。更にセスナが一機飛来した。RKB毎日放送機である。二機が縦横に飛び交う。

船団はおよそ三百五十隻。昭和三十七年にこの御生祭を復活してから、今年で四回目、最高の船数である。

九時頃、漸く霧が晴れて来た。対岸の江口、神湊が見え初めた。船団はやや地ノ島（東側）寄りに進む。御座船の両側の随行船が、御座船に近付いて来る。それにしたがって、数隻が近付いて来る。それに御座船に近付けたい、というのが人情であろう。

神湊の浜辺を走る人々の影が遥かに見える。見渡す限り、海を埋めつくした大船団を拝観せんものと、走る人々であろう。

船団は大きく右折して神湊の港口にさしかかった。ここで先導船と御座船の四隻だけが波止場に入った。他は全船停止して、神璽の御上陸を見守った。御座船が接岸すると、すかさず、合図の打上げ花火が轟いた。

国家鎮護宗像大社の大幟をつけた御座船をあとに、神璽は神職の手に捧げられて、静かに御上陸。神湊の港に集集した人垣の中を通って五百米程進み、やがて海浜に設けられた御座所に御到着された。御座所には、御出迎えのために出御された辺津宮の神璽が既に安置されており、ここに宗像三宮がお揃いになられた訳である。

直ちに頓宮祭開始。久保宮司の感激の祝詞が奏上された。

人々は、朝霧の中から忽如として、出現した大船団の有様を、誠に神船の出現と見まごうばかりであったと話していた。それが全船団の出揃う頃に、背後の霧が晴れ上り、神々の出現に全くふさわしい光景であった。自然に手を合わせて拝んだ、と語っていた。

「あれだけの船の数を揃えることは、普通では到底できません。神様に随行するのだということで漁民が、われもわれもと馳けつけたのです。」

漁業協同組合連合会長の遠藤式次郎氏が、漁民信仰の厚さを、と感に堪えたように話しておられた。

十時三十分迄御駐輦。同刻、三台の御座車を先頭に二十数台の供奉車と共に、鹵簿が出御され、十時五十分、田島の辺津宮に入御された。境内には数百の露店が並び、秋晴れの祭り日和に集まった人々の中を神璽が御通りになり、無事に御生祭と放生会第一日祭が斎行されたのであった。

十二時のRKBのテレビには、画面一杯に御生祭の大船団が映し出され、「九州男児ならでは無事に御生祭と放生会第一日祭が斎行されたのであった。

十二時のRKBのテレビには、画面一杯に御生祭の大船団が映し出され、「九州男児ならでは無事に御生祭と放生会第一日祭が斎行されたのであった。

十時三十分迄御駐輦。同刻、三台の御座車を先頭に二十数台の供奉車と共に、鹵簿が出御され、十時五十分、田島の辺津宮に入御された。境内には数百の露店が並び、秋晴れの祭り日和に集まった人々の中を神璽が御通りになり、無事に御生祭と放生会第一日祭が斎行されたのであった。

十二時のRKBのテレビには、画面一杯に御生祭の大船団が映し出され、「九州男児ならでは

霜月のまつり

一　日　月次祭　午前十時
一五日　文化祭　午前十時
三　日　生産感謝祭　午前十時

神社では、この日の祭が新嘗祭にあたる。新穀をお供えして今年の豊作を感謝し、あらゆる産業文化の振興を祈念する。

廿三日　生産感謝祭　午前十時

神社では、この日の祭が新嘗祭にあたる。新穀をお供えして今年の豊作を感謝し、あらゆる産業文化の振興を祈念する。

今月の交通訓

○静かに、静かに行きましょう

森林都市サニー店舗地鎮祭

九月九日午后一時、折柄中型台風二十三号の影響で雨降る中を、サニー森林都市店の地鎮祭が関係者多数参列のもとに斎行された。建設地は赤間駅西方一キロの地、森林都市中央部に位置する所にあり、団地内の買物客に便宜を与えるべく設立されるものである。将来はこの鉄骨二階建の建物の横に大規模なショッピングセンターを建設し、全店舗は管理事務所に転用するとの事である。

日本新聞夕刊には「ここにあり、宗像水軍」と題して大きな写真と共に報導された。

（写真は御座船と一大船団）

社務日誌抄

十月一日　秋季大祭第一日
午前八時、大島中津宮に於て出御祭が行われ、郡内七浦漁船三百五十余隻が船団を組んでパレードした。この日は海も穏かで絶好の秋日和であった。午前十一時縁社大祭。出光宝物館長、吉武氏子会長他多数が参列した。

二　日　早朝、朝霧を破って流鏑馬が古式豊かに行われた。この後十時から郡内六中学の生徒によって対抗相撲大会が行われ折からの参拝者を喜ばせた。

大祭には年に一度の翁舞が福岡在住の能楽師の面々によって奉仕され、秘蔵の翁面が曾用されて悪疫退散の古式にのっとって静かに舞われた。

三　日　渡辺嘱託恵賀海神社秋季大祭に奉仕。

四　日　徳山宗像神社秋季大祭久保宮司、楠本権祢宜、大野出仕巫女二名奉仕の為出向

五　日　出光興産福岡支店小野所務課長他三名来社。

八　日　一筆一切縁保存相到霊国宝修理装潢師連盟岡岩太郎氏来社、中津宮秋季大祭斎行。楠本権祢宜入院。

一〇日　勝浦浜部落に鎮座する縫殿宮の秋祭りに大野出仕出向。

一一日　親和会大旅行始まる。

一二日　的原神社大祭、本田権祢宜奉仕。

一三日　近畿日本ツーリスト（株）三戸貞夫氏来社。

一五日　月次祭斎行。

一七日　宗像光影会撮影会、美人モデル嬢二名参加。

一九日　京都市妙心寺管長他二名来社。沖津宮佐藤出仕帰島の為、渡辺嘱託渡島勤務を交替。

二〇日　九大鏡山教授来社。福岡市千代町校区婦人会一行三十名参拝。

二二日　福岡地方裁判所長高原太郎氏他数名来社。

二三日　猿賀神社山谷宮司来社

二五日　森林都市中央診療所起工式。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027　有線277－1番

宗像四郎氏貞（三十一）

山下半可　作
福田長庵　画

楢葉の末（二）

重臣会議で山田後室母子抹消論を主張した吉田飛騨守は、帰宅するや否や妻の弟の峯玄蕃を呼び寄せた。

「今日、しかじかの会議があった。古部、許斐の一族、道鶴立を申す者多く、長老の石松和泉守の言葉を聞こうともせずして、何かと申す段心得がたし。又明日氏貞公へ如何よろしかの申すなるべし。然らば、反対をとなえし我らが身の上に大事出て来たるべし。今夜山田の里に釣り後室母子を殺し申すべし。其の方も来い給え」

玄蕃が驚いた。

「これは大事の思し召し立ちにて候。同じくは明日の御詮議次第にて然るべく候わんや」

玄蕃が躊躇したので、飛騨守の妻女が口を出した。

「齢すでに五十になり給うわが夫の申さるるを承引せざる者輩者め。我々、其の方の行末を思えば殿の御供申し、山田へ行きて殺し申されよ。ひらに頼み申すなり」

妻女はわが弟を立身出世させる好機とばかり説き立てた。昔から牝鶏がときをつくると家を滅ぼすという諺があるが、此の場合がそうであった。

玄蕃が不承々々に諾いたのを見て、飛騨守は更に

「然らば、我らの存念ばかりには叶いがたし。野中勘解由左衛門と石松又兵衛とは年来の知友なれば、相談すべし。又、石松和泉殿は宗像の大老なれば相談申すべし」

夜中にもかかわらず、早速出かけた。先ず野中と石松に意中を打ち明けた。勘解由らも同様な意見であったので、それより打ち揃って石松和泉守を訪ねた。和泉守は先刻の会議の時も、しかとした発言をしなかったが、実はすでに耄碌していたのであった。七十余才の和泉守は、吉田飛騨守の云うことを「ふむ、ふむ」と聞くばかりであった。

長老重役の同意を得た飛騨守はその足で山田の里へ出向いた。今夜中に事を運んで置かなければ、計画が画餅に帰するかも知れぬと考えたからであった。

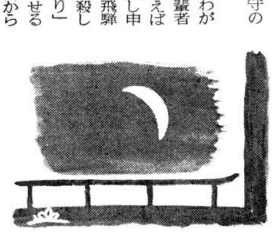
夜も更けていた。二十三夜の月が雲間に見えかくれしていた。

吉田飛騨守、石松又兵衛、峯玄蕃、野中勘解由らは家僕らをも含めて数十名、隠密行動をとった。

山田の里に入ると、吉田は一行を後室の館の門前に伏せさせて、一人で案内を乞うた。

館には後室と菊姫、侍女として小少将、三ケ月、小夜、花ノ尾という四人の女房たちがいた。

吉田は代々の主筋に当る人達を殺害しようとしていたが、いざ



事に望んでみると、それがたとえ宗像家後代の安泰のためとはいえ、現実は余りにもむごたらしい事であった。殺害させる前に、自分独りだけでも最後のおいとまを乞いをしようと思ったのも当然であったかもしれない。

山田の後室（七十七代正氏の室）は飛騨守を引見した。

時候の挨拶ののち、四方山の物語をした末に、後室が心配そうに

「誠であろうか。後室が心配そうに殺されたんたくらむ人々のありという。これは一体どうした訳なのでありましょう」

こう云い乍ら、俄かに不安げに更にこう続けた。

「そこもとも、そのような悪逆の心を持っているのではありませぬか。この夜更に来られたのも、私をなきものにする為ではないのですか。とうに覚悟は出来ています故、本当のことを聞かせて下さい。私は女の身ですから、何の手向いも出来ませぬ。本当のことを知って覚悟を固めたいと思います。吉田、いかに」

これを聞いて、悪人の吉田も流石に胸にこたえた。涙をはらはらと流して

「これは思いもよらぬ御詞にて候。ゆめゆめ左様のこと承らず候。まして言い奉らんとは、かえって御情なき御せとこそ存じ候え。それがし明日は大島に用事の儀候いて、渡海すべきにて候えば、暫しのことは申しながら、御暇乞い申し上げんとてこそ、御前に罷り出て候え。人の申すとても、誠と思し召されんは、ひが事にてや侍るらん」

まことしやかに申し上げた。吉田も心中は辛かったに違いない。辛いには違いないが、偽りをまことしやかに申し上げねばならぬ今の己れが情無かった。彼の流した涙は、自分自身のジレンマに対する感傷であった。

これで後室の不安も少しは柔らいだようであった。飛騨守は深く低頭して御前を退出した。自分の来配を以て害し奉るべき主筋の人に対して、彼は彼なりに最後の御暇をこうたのであった。

表に出た飛騨守は、門前に待機していた石松ら幹部を集めて、かねての手筈を再確認した。

冷えびえした夜気の中に物具の触れ合うひそかな音がした。

吉田飛騨守が来配をあげると、さっと振った。足音を忍ばせた一行が館を取り囲んだ。

峯玄蕃は菊姫の居室に侵入しようとした。折りしも館の女性たちは、今宵は廿三夜の月待ちなので、その準備をしていた。菊姫は入浴を終ったばかりで、濡れ髪をしぼり、梳っている所であった。窓の前に坐ってほのかな月明りを受けた美しい顔が白く浮いていた。その菊姫が、玄蕃の入って来た気配に気付いて、きっと振り返った。玄蕃の足がすくんだ。

（つづく）

出光興産門司支店落成式

出光興産創業の地、門司の中心地に今度新しく支店が建設された。そして、地下一階、地上四階、塔屋二階のすばらしい鉄筋コンクリート造りの支店並びに給油所の落成式が二十七日盛大に挙行された。

社長出光佐三氏を始め各関係者、地元知名士、招待客が多数参列し宗像大社の職員の奉仕によって儀式は滞りなく斎行された。

支店は清水建設株式会社の手によって、去年八月三十一日着工、四十年九月二十七日竣工となった。

わずか一年にして、見事な建築が完成した訳で技術の進歩には目を見張るものがある。

建築の概要を見ると、敷地面積（二九六、〇四坪）。建築面積延（一、一四九、三〇坪）。

構造一鉄筋コンクリート造。

地階は二百十二坪で機械室となっており、一階は百七十八坪でガソリンスタンド、中二階八十八坪二階百九十二坪、三階二百十八坪これらほいずれも出光興産の事務室であるが、四階二百十八坪は特に門司市民の為に婦人と青年の家に開放、各種の会場として利用出来ると云う。

高さ地面より塔屋まで二七・四五米。鉄筋コンクリート造り、一部タイル張りで、あとは金属板仕上げとなっている。総工費は三億円である。

次に門司支店の変遷を記しておこう。

・明治四十四年、出光佐三社長門司に出光商会を創立、東本町一丁目に本店を置く。

・大正三年、東本町二丁目に移転。

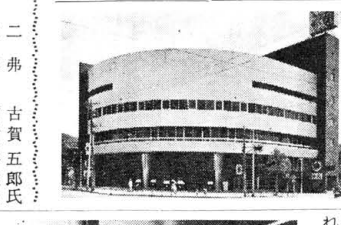
・大正十一年、二十三銀行ビル（現大分銀行）完成と共に本店をその二階に移す。

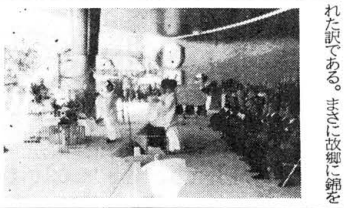
・昭和十五年、出光興産株式会社創設により本社を東京に移し、門司支店となる。

・昭和三十八年、北九州、大分、山口県（除東部）を統轄する支店として新しく発足、今日に至る。

さて出光興産発祥の地に五十四年ぶりに壮大なる新支店が完成された訳である。まさに故郷に錦を飾ったものといえよう。

鎮祭された宗像大神の御加護のもとに、同社が益々発展することを祈るものである。





便り

出光興産門司支店落成式に際し、次の方々から祝電、祝花、祝状、祝品、祝金を頂きました。

二弗　古賀五郎氏
二弗　信行浮雄氏
二弗　結城夫人
二弗　中村次郎平
三弗　計金二十八弗也

では右よろしくお願い申上げます。

在米　中村次郎平

啓上

過日は突然お邪魔申し上げ、種々有益なお話をうかがました上、宝物殿も拝観させて頂き有難う存じました。歴史の古い神社として流石に貴重な品々のあること、また数々の史実のあることがわかり感心いたしました。小生岩波書店で、歴史講座の編纂に携わりおりました時に、父より幼心に聞きおぼえていたことを学問的に確めましたが、この度実際に神社に詣でて更に知識をひろめましたことを喜んでおります。これからは更に深まりを強めて行きたいと存じます。取り急ぎ御礼まで　敬具

東京都世田谷区　宗像　寛

宗像大社宝物館

宝物を訪ねて

神宝翁面について

この翁面は辺津宮の本殿に秘蔵され、一般に公開されていなかったが、完全な防災施設を完備した宝物館が完成したので本年より宝物館に収蔵し一般に展観することになった。

この翁面には、次の様な物語りが伝わっている。

明応八年（一四九九）、時の宗像神社大宮司興氏は勢力隆々たるものがあった。たまく鐘の岬（現在の鐘崎）に、阿弥陀経石と共に宗国よりもたらされた言う鐘が沈んで居ると伝えられていた。時に大宮司はこれを引揚げようと、石松和泉、吉田飛騨の両重臣に命じ、鐘ノ岬の部落民多数と蜑（海士）を集め、船に万力をつけ引揚げにかかった。すると一天にわかにかき曇り、風雨沛然とし、雨は怒涛を呼び、荒天となった。興氏は、これは龍神がこの鐘の引揚げられるのを惜しんで居られるのだと察し、作業を中止させた。やがて風雨は止み、元の天候に還り、静かな海面となった。不思議なことその海面に、蛸のつった面が浮上した。それがこの翁面である。一同驚きこれは龍神が鐘のかわりに授けられたものとして、宗像神社の御神宝として奉ったと伝えられている。

以来年に一度、由緒深い秋の祭りの第二日（現十月二日）にこれを付け、翁舞として奉納し、珍重又天明年間の悪病流行の際、この面を拝み、病気を免れ、又病気の平癒した者が引続いて及んで、これを称して悪疫退散の面として信仰された。

いま、社頭で翁面、翁鈴、翁杓子などの模写奉製品が授与されている。

翁面は今年から当社の宝物館に陳列されているので、何時でも拝観することができる。目の利く人の話によると、この面は非常に出来が良いとのことである。恐らく室町時代の早い頃に、能楽による翁舞が始められるとすぐに作製されたものではあるまいかと思われる。作り方が古雅であり、大きさが大きい。後のものに様に面相が様式化し固定化していない、などと沢山の点を指摘していた。

郷土が生んだ大先輩

出光佐三氏を迎え

宗像青年会議所結成総会開催

九月、新秋の大気あくまでも澄み渡る二十六日、宗像郡内各町村より参集した二十才以上、四十才迄の青年男子七十餘名が、午前十時より、宗像町村会館の二階に於て、かねて発起人会及び準備委員会で協議していた定款、其の他を決議し、「宗像青年会議所」と名付け、目的を、

「地域社会に於ける、相互信頼を旨とし、経済、文化に関する諸問題を研究実施し、志さしを同じくする友好団体と相協力して、地域社会の正しい発展を図る」とうたい役員を左記の通り選考した。

代表幹事　天野　昭男（南郷）
副　〃　伊豆　善也（吉武）
〃　〃　薄　良一（河東）
〃　〃　綱脇　博幸（津屋崎）
幹　事　和田　豊（岬）
〃　井土　熊城（池野）
〃　深田　氏恒（田島）
〃　永島　敬三（勝浦）
〃　広渡堅太郎（福間）
〃　倉田　和哉（神興）
〃　伊東　文武（上西郷）
〃　吉田　昭生（東郷）
〃　白木　義次（赤間）
〃　古屋敷　久（東郷）
会計　石津　龍巳（津屋崎）
会計監事　石津　龍巳（津屋崎）
〃　河野　道弘（東郷）

尚引続き世界の出光として知られた出光佐三氏を囲み、宗像郡の将来の展望と、各会員に与えられた責任の重大さを教えて戴き、其の使命達成の心構えについて御懇切なる御講助言をおおぎ、会の今後の発展を祈り午ら午后五時散会した。

町村往来

◇津屋崎町内親善野球大会…3日午前9時、津屋崎中グランド。11チームが参加。

◇緑町公民館できる。…福間町公民館の緑町分館がこのほど完成、木造平屋建で250平方メートル。和洋室の集会場、調理場などをなそうている。工費六百万円。

◇津屋崎町社会教育振興大会…3日午前8時半、津屋崎中体育館。450人が参加して青少年問題について討議した。

◇自動車展示会：宗像農協は農民のための普通、軽乗用車、トラック、ライトバンの展示会をメーカー三社の協力で開いた。

◇玄海中学校園：環境美化整備のため、学校園をつくることになり、4日起工式を行なった。

◇老人ホーム慰問…10日午後、津屋崎町青年団寄島大寿大団長ら30余人は宗像町吉武の老人ホーム緑風園を慰問。

◇永年勤続議員表彰…13日午前10時、郡町村議長会議室で、ことし10年以上になった19人の議員を表彰した。被表彰者はつぎのとおり。

（宗像町）山本国雄、赤尾又義
山下竜雄、中村与三、市丸安郎、
（福間町）深川愛人、高木常吉、
（津屋崎町）石津源吉、川崎太市
永鳥宇三郎、大賀勝美、阿部市郎
（玄海町）田中富樹、白石隆祐、
黒田岩人、占部満（大島村）遠藤
久一郎、里目新一、遠藤文雄
◇秋まつり：福間町の小島神社の秋まつりは16日午後6時から昭和町青年団の奉納相撲大会や婦人会員の生け花大会など。

◇大島小学校分校初披露…5月30日、学校園の校歌発表会が行なわれた。

◇都内中学陸上競技大会…7日午前9時半、玄海中学校グラウンド。六十、百、二百、四百、八百、八十ハードル、千五百、四千、走り高、走り幅、砲丸投げの十一種。都内六学校から三百五十人の代表選手が出場。

◇玄海町に町営住宅…同町平田尻に8戸、鐘崎に9戸が来年1月はじめ完成、同月末入居。木造平屋1戸建て、2へや。

◇交通法令講習会…10日午前9時半、宗像署会議室。9月中に郡内各所で開いた講習会に、勤務のつごうで受験できなかった人を対象にしている。

ある体験

宗像伝説　其の五十五

大島住人　藤田貞蔵

漂流奇談

筑前大島に藤田貞蔵という商人があった。文政四年（一四二一年前）八月十四日、いつもの様に島内の必需品を買入れるために、博多に渡海した。往路は無事に渡海し、商用をすませての帰途、俄かに海上が荒れ出した。秋の空は変り易い。おやと思う間に暴風となった。怒涛が逆巻き、折しも日が暮れた。今と違って当時の漁船には何の設備もない。四方暗黒の海上には何も見えない。船頭水夫ら三名の者は必死になって船を繰っていたが、今はどうしようも無くなった。

そのうちに山の様な横波が押し寄せた。あっという間も無く、船が転覆して、一同の者が暗黒の海上に投げ出された。浮きつ沈みつしているうちに、貞蔵は一枚の船板にとりつくことが出来た。あとは運を天に委せるほかは無かった。

激しい波浪に揉まれ乍ら流された。同行の者らは離ればなれになり、呼べど叫べど答えない。

ふと、貞蔵は「中津宮様」のことを思い出した。それからは夢中で祈り続けた。どれ位経ったろうか。大島の山頂とおぼしきあたりに、一つの大きな火が見えた。

"御神火？"と思う間も無く、その火は見えなくなった。何度も気を付けて見たが、あとは遂に見ることは出来なかった。

それからは何ということもなく漂流した。身体の感覚は何もなくなってしまった。貞蔵は、自分でも目が覚めているのか、眠っているのか分からなくなっていた。頻りに眠りを催していた時に、何から大きな鳥が頭の上に飛んで来て、何か食物をくわえて来て貞蔵の口に食わせるような気がした。そんなことが何度もあった。貞蔵は遂に気を失ってしまった。

長州萩の三島村の某が、朝早く汐井を汲みに海辺に下った。すると、何か白いものが岸辺遥かに見える。何であろうかと近寄って驚いた。破れ船板にしっかりとつかまった人間が打ち上げられている。よく見ると、生きているようである。「おうい」と耳元で呼ぶと、かすかに目をあけた。

生きている。某はあわてて助け上げようとした。ところが、漂流していた間、余程しっかりつかまえていたのであろう。つかんだ船板をどうしても離さない。いや離れないのであった。某は、近所の人々を呼び集めて来た。そして漂流者の船板を、手の部分だけ残して鋸切りで放した。

戸板で人家に運ばれた漂流者は、村人の手厚い看護によって蘇生した。火気をあてて、暖めているうちに、その肌にも生色がよみがえって来た。

江口浜より大島を望む

漂流者は貞蔵であった。村人は貞蔵の漂流談を聞いて驚いた。その日は貞蔵が漂難した八月十四日から数えて七日目に当っていたのである。よくもまあ、命があったものである。鰹の餌食にもならず、特に身体の損傷もなく、然も海上三十里（一二〇粁）を漂流して一命を取り止めた例は聞いたこともない。聞く者は何れも驚き、身を震わせて聞き入った。

特に「中津宮様」のくだりでは、一同手を合わせて遥か筑紫の方を伏し拝むのであった。

その時の、ほかの乗組員で助かった者は無く、生き残ったのは藤田貞蔵だけであった。彼が郷里に渡海した時に、何から村人たちの「中津宮様」への信仰がますます高揚したことは、云う迄もない。

（H）

想随

これは一被爆者の手記である。『昭和二十年八月六日、私は広島市内の陸軍病院（本院）の二等に身を横たえていた。当時、軍学生であった私は、その夏、急性腎臓炎に罹り、遂く広島郊外に疎開していた学校から再び広島市に移り、入院療養中の身であった。その朝は雲一つない、日本晴の上天気だった。朝食を終え、寝台に仰臥して本を読んでいた。突然、黄色い閃光と激しい衝撃を感じた瞬間、数米吹き飛ばされ、床の上にたたきつけられていた。〝直撃弾〟〝突嗟にそう思った。ばらくとくずれ落ちてくる壁ったものにおい、異様な感じに思わず手をやった掌にちりぢりに焦げた頭髪の感触、私は死を思った。十六年の生涯がまさに走馬燈のように脳裡を駆け廻った。肉親の顔、故郷の山川が浮びそして意識は薄れていった。

「××」「××」私を呼ぶ声に我にかえった。夢中で屋外に這い出した。私の病室には隣のベッドに友人のTが一緒に入院して居り、彼は運よく窓外に吹き飛ばされ、彼は私が居ないので大声で探していたのである。外に出て我が目を疑った。つい先刻まで整然と建ち並んでいた病棟は見るかげもなくくずれ落ちていたのである。私はTと一緒に病院の裏手、太田河畔に難を避けた。間もなく各所から火の手が起り、周囲は火の海と化した。背後と、対岸から吹きつける熱風は、身を焦がさんばかりであった。火に追われ、橋上に雲集した人々は溺れて水に落ち、遂には橋諸共焼け落ちていった。船で脱出した人達も、熱風におおられて泣き騒ぐ子供達に船は転覆、多く水中に没していった。まさに地獄図絵であった。燃えさかる火はやがて雲をとんだ。黒雲が白日の光をとざし、大粒の雨が瓦礫に降りそそいだ。熱風にほてった身体にはそれは慈雨のように思えた。然しこの黒い雨が多量の放射能を含んだ死の雨であることは誰も知るよしもなかったのである。

河畔に身を横たえて長い夜を過した。日が昇り、そして惨禍の全容が眼前に展開した。美しい鯉の城は跡形もなく、一面の瓦礫の間に焼けただれたビルが僅かにその形をとゞめていた。山々さえも緑の肌を焦がし尚燃え続けていた。

河畔に応急につくられた天幕で簡単な手当を受け、四、五日をそこで過した。そして学校からの救助隊の手で疎開先の学校に移された。当時市内の病院に入院療養中の生徒は十四、五名程いた。そしてその中の四、五名は即死又は数日後に死亡、残りの名前が危く難を免れ学校に運ばれ、手当を受けることになった。私はそれから二カ月程後に漸く回復し、故郷に帰ることが出来たのである。

が、被爆から退院までの八十余日、振り返えればそれはあたかも、暗夜に断崖上の道を通り過ぎたようなものであった。一歩踏みあやまれば奈落の底に落ちる長い道を無事に私は通りおおせた。しかも自分の意思ではなく、何者かに導かれたかのように、何時か生の広野に辿りついていたのである。まさに好運であった。以下その数々を拾ってみよう。

最初に被爆の朝のことである。が、その日友人の一人が朝早く退院した。彼は私のいた病棟より数百米離れた玄関近くの病棟に入院していたのであるが、私は彼の退院を見送りに行く約束をしていた。所が、その朝つい寝坊をしてしまい、目を覚した時には、とっくに時間は過ぎており、違約を悔いながらそのまゝ病室にいた。所が図らずもこれが幸いした。

被害は遥かに甚大であった。

（つづく）

被爆心地により近かった彼の病棟は被爆と同時に建物は壊滅し、その被害は遥かに甚大であった。

（つづく）

宗像大社献詠 俳句作品集 三五

津屋崎　毛利　夜潮
お粗末な案山子に飾りテープかな
津屋崎　白石百合蔵
月の栖む豚舎の跡の水溜り
津屋崎　井浦　良介
朽ちし鉱夫の家の数歩に咲くコスモス
津屋崎　久羽　文王
うべ碧るるサイクリングの学生に
津屋崎　勝田　光一
バスの客降り海に寒満月
津屋崎　浜津　鴻浪
脱毛を丸るめやかな風にやる
津屋崎　吉野たかし
菊月夜女の唄の拡がりて
津屋崎　鶴　美津男
三日月の油槽の肩に色得つつ
津屋崎　西住喜三郎
来る雁へ北向く離の波高まる
津屋崎　岩見加代子
秋草を壷に充たして充たされず
津屋崎　占部　河童
池に月得し潮鳴奇の花さまざま
水　戸　小沢　栄城
また一人また一人来る月の客
東　郷　小野　花居
望月の雲に十六夜柿葉寿司
東　郷　小野　淡坡
ゴム深の靴さびくと秋出水
厚　狭　篠田　南洞
池平して酔える村人秋祭近し

日立と共に五十年 (六)

倉田主税会長の半生記

その年、すなわち昭和五年に、日立製作所は助川駅（いまの日立駅）の近くに十万坪の土地を求め新工場を建設した。これがいわゆる日立海岸工場であるが、日立製作所として、この十万坪の敷地を獲得したことは 後年の大発展のため、実に大きな布石っていってよい。この思いきった布石があったからこそ、日立の事業は順調に進展し、ついに世界的大企業たることができたのである。創立者であり、初代社長である小平がいかに先見の明があり、同時に、いかに大胆であり、且つまた、いかに決断に富んだ偉人であるかを、改めて知るのである。主税にとって、すべての意味において彼は最高の"師"であるといえよう。

主税が電線係長から"電線部長"になったのは、昭和十年一月一日付である。転制改革が行われ、電線係が部になったためである。同じ仕事をし、同じ数の部下を持っても"係長"というのと"部長"というのとでは、たいへん感じがちがう。ここに、対外的の場合にそうである。そのころの電線工場は千数百名の臣工と、数十名の臣員を擁する大工場であった。だから、たとえ一係長とはいえ、主税の臣権はきわめて大きく、したがって責任も重大だった。

「部長、ご昇格おめでとうございます」部下の誰彼は、年始かたがたそういって挨拶をしに来たが、主税自身は格別うれしいというような気はしなかった。係長でも、部長でも、することは同じである。しかし、自分の年令を考え、妻や子供たちのことに思いをやると、部長になったほうがいいようにも考えられるのだ。夫や父親が、一介の"係長"であるのと、一見して堂々とした感じのする"部長"であるのとでは、かなりちがうのではないかと考えると、苦笑したくなるのである。すでにこのころには、日立工場の体制は、はっきりと戦時色を反映していた。

すでに満州事変が起こり、上海事件がこれにつづき、ついに満州国の独立となり、日本の国際連盟脱退となっていた。ドイツではヒットラーのナチスは第一党となり、彼は首相から総統へとのぼり、ついに天下の権をにぎっていた。やがて来るべき第二次世界大戦の序曲はきわめて低くはあるが、無気味な不協和音をもって奏でられはじめていたのである。少なくとも、極東の天地において、日本は中国とのあいだに次第に泥沼のような関係をつくりつつあったのである。軍部は次第に政治に対する圧力を増し、官僚もまたこれに追随して"虎の威"を借ることに熱中しはじめていた。

日立に限らず、重工業部門の各種産業が好むと否とにかかわらず徐々にその機構において、生産体系において、戦時色を帯びるに到ったことは、まことにやむを得ない成行であった。電線工場は、このころにはゴム絶縁鉛被線、船舶用電線、車輛用電線、ケーブル通信用ゴム線などから、さらに航空機用電線に到るなど、きわめて多種類の、しかも高級な電線を生産していた。

こうして一路躍進をつづけている電線工場の責任者として、主税の責任はきわめて重大であった。家庭にあっては昭和四年に五男の博臣が生まれ、九年には六男の聴郎が生まれたが、不幸にしてこの聴郎は出生後すぐに夭折してしまった。主税夫妻にとって、結婚以来さいしょの痛恨事であった。しかも、主税にとっては、悲しみはさらに重なったのである。すなわち、昭和十一年には次弟の神崎主計が病魔に斃れ、さらにつづいて翌十二年には、母のシナが七十才の生涯を閉じて、八年前に他界した父主来造のあとを追ったのである。父の他界以来、母のシナは助川町の主税の家庭に迎えられ、むすこや、嫁および五人の孫たちにかこまれて、楽しく余生を送っていた。四十九才の主税は、母の死に遭い、深夜ひとり妻子にかくれて眼ぶたをぬぐった。

昭和十二年七月に日支事変が起こると、日本は完全に戦時国家に変貌した。経済政策の中心課題は"生産力増強"の一点にしぼられ、そのためには、平時においては想像もできないような、いろいろの法令が公布施行されるに到った。"生産力"ということばは、その上に"軍需品"という文字をつけ加える必要があろう。そうしないと、当時の、今からふり返ってみて異常とも思えるような重化学工業生産率の急上昇が理解できにくいからだ。昭和十二年九月から十七年二月までに供給された設備資金総額は一八四億五千万円の巨額にのぼったが、その六四パーセントが重化学工業部門に投入されたのである。その結果、昭和十一年から十六年にいたる工業生産額は、一二二億円から三〇五億円と約二倍半に増大した。ちなみに、化学工業が二・〇倍であるのに対し、機械工業は、じつに五・三倍という驚異的な飛躍を示したのである。労働人員について見れば、昭和十一年末に、金労働者比率は三八パーセントにとどまるのに対し、十六年末には五七パーセントとはねあがっている。

"戦時"というものが、いかなるものであるかは、これらの数字によって端的に察知できるのではなかろうか。国家は、個人と企業団体とを問わず、あらゆる生産力を"軍需品生産"にふりむけることを要請し、且つ、その力を一二〇パーセントまで発揮することを命令するのだ。

日立製作所も、当然"戦時"の影響をまぬがれることはできなかった。製品についていえば、事変勃発に先立ってすでに電気扇、冷蔵庫等には物品税をかけることになったので、売れ行きは落ちざるを得なかった。つづいて家庭用井戸ポンプが製造禁止となり、さらに電気扇の一部もこれに加えられた。その次にはエレベーターの製造が禁止されるに至った。事変がはじまると、怒ち資材の面において徹底的な統制が行われることになった。銅、銑鉄などは配給制となったのである。従って、本店に資材部を新設し 資材入手その他に関するすべての事務を一元的に掌ることになった。八月下旬には、亀有工場に戦車工場をつくるための敷地地鎮祭が行われたのである。

資材入手のための資材部と前後して、軍関係の受注品の激増ともない、その納入事務を司るために軍納部が本店機構の一部として新設された。主税が、新設軍納部の部長として任命されたのは、昭和十三年九月一日であった。

明治四十五年の入社から、このときまで思えば長い年月であった。紅顔二十四才の青年は壮年五十才の男盛りとなっていた。鉄板工場で、五、六名の臣工を監督していた主税は、やがて小さいながら八〇坪の銅鞴工場の責任者となり、いまでは敷地二万坪の電線工場の主人公として、千数百名の従業員を預り、会社の一事業部門の責任者として重責を果しつつあるのだ。この間、いろいろの問題にぶつかりながらよく乗り越えてきた。困難に直面しながら、よくそれを打開し前進して来た。次々に新しい製品をつくり出し、会社全体の発展に貢献して来た。連合消防団長としても、最善の努力をして来たのである。

しかも、それは茫として過ぎ去った短い時間であったともいうべきだ。（文責　養父　守）

思えば長い年月であった。

丸陸常琵琶 (十五)

四、琵琶歌「常陸丸」

常陸丸事件は日露戦争の後も永く国民の胸に残り、いつまでも歌い継がれた。ここに採録したのは福岡市大学通大学病院前に住む筑前琵琶の高野玉嵐師が大正元年作曲された「玄海の血潮」と題する琵琶歌である。高野氏は宗像大社の篤信家でもあり、殆ど同時頃「宗像三女神奉賛歌」をも作っている。

昭和三十年、同勢七人で大島村岩瀬にある宗像大社神津宮遥拝所に於て遥に浮ぶ沖ノ島を拝し「玄海の血潮」及び「宗像三女神賛歌」を弾奏奉納したことがある。その際使用した琵琶は中津宮に奉納せられ現在も大切に保管されている。

昭和三十七年十月二日の辺津宮放生会大祭に奉納された。

筑前琵琶

玄海の血潮

征露の戦やうくに進みくて南山の険咽も既に打ち破り音に聞えし要塞の旅順口も陥落鬱の住むてふ満州の君が御稜威の旗風今はなびかぬ草もなし時しも頃は明治三十有七年しかも水無月中五日

玄海灘の早中に吹く朝風に日の丸の旗ひるがへす常陸丸たゞ一節に走り来て我を取りまく敵の船こは何事と言ふ間なく乱射乱けき雨あられ進みのがれんひまもなし千里を走る猛獣も水に入りては如何にせん船路はなれて白浪の寄るべや如何に遠かんかなすべかの黒煙すさまくの中に見えて出来ぬ出来ぬ

（一頁よりつゞく）

朝　町　井上陽之助
日おもての暑さは夏とかはらねど
萩の葉をよぐ古里の野よ
（野原に遊びて）
大　井　安部　重郎
穂芒の抽き出しばかり紅刷きて梨
〃　原田　リノ
放生会の客の用意に甘酒の麹をこす指ほの温し
〃　吉田　杏子
やがて土に還る落葉を掃き寄せて
わびしと思ふ秋の夕べれ
東　郷　有吉　春子
春菊の芽生えの中に紫蘇の花小さく白く散らばりてゐぬ
吉　武　原田　松代
筑後平野稲穂の風の吹く窓に眺む
〃　原田　リノ
事多き一日なりしが客送り出して見てをり日の落つるさま
吉　留　山下しづえ
稲の穂はゆたかにたれぬ穏る秋農を業とはせずともうれし
〃　安部　静子
火を放ちて焼きければ都の方を伏し拝み
〃　吉田　杏子
やがて土に還る落葉を掃き寄せて
わびしと思ふ秋の夕べれ
東　郷　有吉　春子
春菊の芽生えの中に紫蘇の花小さく白く散らばりてゐぬ
名　島　久保　房江
筑後平野稲穂の風の吹く窓に眺む
武　丸　立石ろせの
ふるさとの野なかの道にバス待て
見てをり日の落つるさま
武　丸　立石　昇
はるばると吾れは来にけり北国の
風は冷たくあたり吹き過ぐ
（北陸にて）

宗像藪庵先生百話

南方 華やかなりし頃

宗像太郎坊

武藤章

第二五軍司令官　ブキチンギ
田辺盛武中将
近衛第二師団　中部
武藤章中将
第四師団　南部
若干の混成旅団　北部　北条少将
第九飛行師団　バレンバン
木下勇中将

やがて、昭和十九年の正月を迎えた。わが部隊の将校団一同は、ご善男であったとの理由で武藤師団長の宿舎に招待された。十二時頃行ったがもう早くから飲んでいたらしく大分酩酊の様子だった。彼は熊本県の出身で、青年時代より斗酒尚辞せぬ豪の者であった）を勤めたが、一九四一年十月十七日（昭和十六年）、政変だというので、松村は情報局からの帰途、三宅坂に寄ってみた。官邸裏庭の芝生の上に椅子を持出して、軍務局の連中が集まっていた。ここで松村（海軍報道部長　戦後参議院議員となり死亡）は次のような事を聞いた。「和戦の事は国家の興亡に関する大事なことだ。内閣の二つや三つ倒れても比むを得ないだろう。殊に米との戦争は海軍が主役だ。その海軍に自信がなければ根本的に考え直す必要がある。むつかしい時局だ」

武藤は幅広い性格だったし、物わかりもよかった。視野の狭い連中からはカメレオンなどと悪口をいわれたものである。考えを固執するよりも現実的だったが、然し成る程だけはいつも持っていた。

一九三七年十一月（昭和十二年）より一九三八年七月まで、中支にいて、松井石根大将の参謀副長をしていた。この間に二存知の南京大虐殺事件が起きて、これが原因で松井大将は死刑となったが、武藤は南京にいなかったと、弁解したことが、彼の死刑の大きな原因の一つとなった。一九三九年九月より、一九四二年四月まで、軍務局長（このあと佐藤賢了となる）を勤めたが、一九四一年十月十七日（昭和十六年）、政変だというので、松村は情報局からの帰途、三宅坂に寄ってみた。官邸裏庭の芝生の上に椅子を持出して、軍務局の連中が集まっていた。ここで松村（海軍報道部長　戦後参議院議員となり死亡）は次のような事を聞いた。「和戦の事は国家の興亡に関する大事なことだ。内閣の二つや三つ倒れても比むを得ないだろう。殊に米との戦争は海軍が主役だ。その海軍に自信がなければ根本的に考え直す必要がある。むつかしい時局だ」

武藤は幅広い性格だったし、物わかりもよかった。視野の狭い連中からはカメレオンなどと悪口をいわれたものである。考えを固執するよりも現実的だったが、然し成る程だけはいつも持っていた。

世の中の空気がその核に接近すや猛烈に反撥するので、彼の威望は四隣を圧した感があったが、話はよく聴いてくれる男であった。勝つた勝つたの最中の昭和十七年四月（三月十三日がメダン占領）に、西村中将と代って武藤がスマトラの近衛師団長を命じられた。

（つづく）

南　郷　中村　幸
堤に今漁船帰り来
奴　山　花田　朝生
古のみいくさ舟もかくやあらむみ
あれ祭りの勇ましき舟群
宮　田　北原　君子
穂芒の抽き出しばかり紅刷きて梨
〃　田　島　小野　迪夫
放生会の客の用意に甘酒の麹をこす指ほの温し
〃　深　田　中野　節子
やがて土に還る落葉を掃き寄せて
わびしと思ふ秋の夕べれ
村山田　金丸　柳蔵
カップルの若き等に交り吾等老も
ゑびの高原のススキ道行く
名　島　久保　房江
旅立ちの明朗すみて秋が枝を焚く
白けむり直ぐにたちおり
武　丸　立石ろせの
ふるさとの野なかの道にバス待て
見てをり日の落つるさま
武　丸　立石　昇
はるばると吾れは来にけり北国の
風は冷たくあたり吹き過ぐ
（北陸にて）

（一頁よりつゞく）

寡会の席をはづして友と来し防波
奴　山　花田　朝生
古のみいくさ舟もかくやあらむみ
あれ祭りの勇ましき舟群
宮　田　北原　君子
穂芒の抽き出しばかり紅刷きて梨
田　島　小野　迪夫
いづかたへ流るゝものかくらき海
を音たて、行く潮鳴りを聴く
深　田　中野　節子
明るき真昼あくたを焼けば焔見え
す鶏の羽根の焦げる匂ひして
村山田　金丸　柳蔵
カップルの若き等に交り吾等老も
ゑびの高原のススキ道行く
名　島　久保　房江
八十の坂を越えたる我が父の国土
調査に今日も出で行く
田　島　小野　迪夫
いづかたへ流るゝものかくらき海
を音たて、行く潮鳴りを聴く
深　田　中野　節子
明るき真昼あくたを焼けば焔見え
す鶏の羽根の焦げる匂ひして
村山田　金丸　柳蔵
カップルの若き等に交り吾等老も
ゑびの高原のススキ道行く
名　島　久保　房江
旅立ちの明朗すみて秋が枝を焚く
白けむり直ぐにたちおり
武　丸　立石ろせの
ふるさとの野なかの道にバス待て
見てをり日の落つるさま
武　丸　立石　昇
はるばると吾れは来にけり北国の
風は冷たくあたり吹き過ぐ
（北陸にて）

我楽苦多告知板

○放生会で混雑した三日目の祭典の直前　冠（かんむり）の見つからぬA君がぷんぷん怒っているのを若手が冷やかした。

「Aさん、頭に来てるぞ」

「余り云うな、オカンムリだ」

○人間誰しもスネになにかしの傷を持つ身。或る時、W君とM君が意見衝突。旗色の悪くなったM君、苦しまぎれに大きな声で「W君！アレ言うぞ」

きゝつとしたW君、思わず困りを見廻して

「そ、それだけは勘弁してくれよ——。ところで、アレとは何かね。」